

水と文学 (9)



前東京都水道局理事 小泉 智和

昭和20年8月6日（月）、広島は、朝から好天気です。暑さもひとしおでした。

午前8時15分、ピカッと、ものすごい、青白い閃光が走り、そして5、6秒後に、ドカーンというものすごい音と共に地面がぐらぐらとゆれました。

B29からの新型爆弾投下です。上空にはいつもの何十倍ものキノコ雲が広がっていきます。

一瞬にして、広島の街は焦土と化し、阿鼻叫喚の地獄に晒されました。

「助けて、助けて」、「水を、水を」の叫びが、街のあちこちに広がりました。

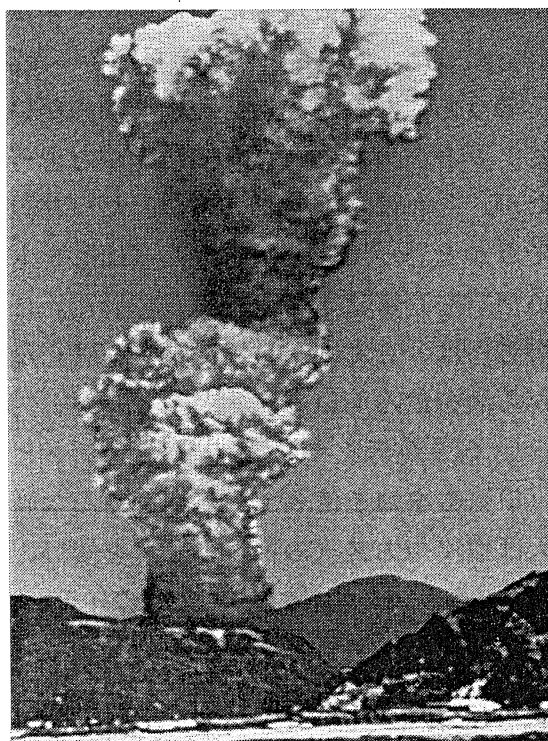
そして、被爆者は日陰のない炎天下で、2日も3日も援護の手を待ったのです。

そんな悲惨な被爆記録を小説にしたものに、井伏鱒二の「黒い雨」があります。

この小説は、広島県神石郡三和町小島の重松静馬さん（小説では閑間重松）の「被爆日記」や姪の矢須子さんの日記等をもとに書かれたものです。

雑誌「新潮」に昭和40年1月号から翌

41年9月号まで、最初は「姪の結婚」、途中で「黒い雨」と改題して連載されました。井伏68歳の時の作品で、その年の野間文芸賞を受賞しました。



広島に投下された原爆のキノコ雲
（朝日新聞社刊「原爆体験記」より）

○ 井伏鱒二年譜

井伏鱒二は、明治31年広島県深安郡賀茂村（現福山市）で生まれました。本名、井伏満寿二です。

大正6年、福山中学校卒業、画家を志しましたが希望がなわず、早稲田大学予科に入学、その後仏文学科に進み小説を書き始めます。同11年、早稲田大学中退、同人雑誌に参加します。短編の名手と言われ、初期の作品、「やんま」、「たま虫を見る」、「鯉」、「山椒魚」等は、いずれも短編です。

昭和2年、東京府下の井荻村（現杉並区）に居を定め、結婚します。

昭和13年、「ジョン万次郎漂流記」で直木賞受賞、戦後、「本日休診」その他で読売文学賞（昭和25年）、「漂民宇三郎」で日本芸術院賞（昭和31年）、「黒い雨」で野間文芸賞（昭和41年）を受賞しています。

昭和41年には、文化勲章を受章し、出身地の広島県から名誉県民（平成元年）に、また長く生活した東京都からは名誉都民（平成2年）に選ばれています。

平成5年逝去、95歳でした。

井伏は、太宰治の面倒を見たことでも知られています。昭和13年、井伏は、自分がしばしば滞在して執筆するのに使用していた山梨県御坂峠の天下茶屋を心身共に弱っていた太宰に紹介しています。また、太宰に石原美知子を紹介し、昭和14年仲人をし、甲府で所帯を持たせています。この後、太宰は井伏の住む杉並に

近い三鷹に居を移しています。



井伏鱒二

○ 黒い雨

「この数年来、小島村の閑間重松は姪の矢須子のことと心に負担を感じてきた。数年来でなくて、今後とも言い知れぬ負担を感じなければならないような気持ちであった。二重にも三重にも負担を引受けているようなものである。理由は、矢須子の縁が遠いという簡単なような事情だが、戦争末期、矢須子は、女子徴用で広島市の第2中学校奉仕隊の炊事部に勤務していたという噂を立てられて、広島から40何里東方の小島村の人たちは、矢須子が原爆病患者だと云っている。患者であることを重松夫妻が秘し隠していると云っている。……………広島の第2中学校奉仕隊は、あの8月6日の朝、天満橋かどこか広島市西部の或る橋の上で訓練を受けているとき被爆した。……………」

「黒い雨」の書き出しです。

被爆日記が続きます。黒い雨について

は、「午前10時ごろではなかったかと思う。雷鳴を轟かせる黒雲が市街の方から押し寄せて、降って来るのは万年筆ぐらいな太さの棒のような雨であった。ぞくぞくするほど寒かった。雨はすぐ止んだ。私は放心状態になっていたらしい。夕立が降りだしたのはトラックに乗っていたときからではないかと思ったりした。私の知覚はずいぶん性能が下落していたに違いなかった。黒い夕立は私の知覚をはぐらかすように、さっと来てさっと去ったのであった。だまされたような雨であった」と、記しています。

そして8月15日、「放送はもう始まっていたが、裏庭に聞こえてくるのはとぎれとぎれの低い言葉であった。僕はその言葉の意味を辿ろうとする代わりに、用水溝に沿うて行ったり来たりして、ちょっと立ちどまったりした。………… “こんな綺麗な流れがここにあったのか”僕は気がついた。その流れの中を鰻の子が行列をつくって、いそいそと遡っている。無数の小さな鰻の子の群れである。見ていて実にめざましい。メソッコという鰻の子よりまだ小さくて、僕の田舎でピリコまたはタタンバリという体調3寸か4寸ぐらいの幼生である。“やあ、のぼるのぼる。水の匂いがするようだ”後から後から引きつづき、数限りなくのぼっていた。…………」

被爆日記は、悲惨な世と裏腹に、変わ

らぬ自然の素晴らしさを描くことによって、終わります。



「オジチャン、水チョウダイ」と訴えるだけの幼い犠牲者
(朝日新聞社刊「原爆体験記」より)

○ その時、広島水道は…………

死者行方不明 約20万人（推定：当時人口31万2000余）、焼失家屋 約5万7千戸、倒壊家屋 約1万5千戸の原爆被害ですが、その時、広島水道はどうだったのでしょうか。広島市水道局の山井隆義次長さんから資料を送っていただきました。

「広島市水道百年史」第9編“原爆と水道”によれば、爆心地から500mの所にあった基町の水道部庁舎は、勤務中の職員と共に全滅しました。水道部全体で

は、186人の全職員中（内29が応召）、83人の方が爆死しました。

一方、2.5Km北方の牛田浄水場は、送水ポンプ室・内燃機関室等のレンガ建物は鉄骨屋根や扉・窓枠等が爆破され、木造建物は殆ど全滅し、送・配電設備も破壊されて停電、ポンプの送水は一斉に停止しました。

しかし、幸いに火災は免れ、しかも配水池は満水状態でしたので給水は継続できましたが、正午近くには、ほぼ流出し尽くしてしまいました。

この頃、非番の職員も、被爆負傷していたにもかかわらず駆けつけ、懸命の応急復旧作業につきました。午後2時ごろ、内燃機関の送水ポンプを応急修理して、自家発電により運転再開し、夕方には、1日4万2,000m³の給水が可能となったのです。

壊滅的な打撃を受けながらも、一時も断水することなくこれを克服した“広島水道”、その後、猛暑の焼け野原の中、漏水の鉛管を叩き潰し、木栓を詰めて歩いた“水道部職員”、そして、東部と西部に分かれて水道復旧に尽力した“管工事業者の人々”……これは、広島水道の誇りであり、また、広島水道人の誇りでもあります。

○ NO MORE HIROSHIMAS

井伏は、詩人神保光太郎との対談の中で、「あれは（「黒い雨」）は、ベトナム戦がさかんなころ、戦争反対の気持ちも含めて書いたのだが、戦争推進者にたいしては全然無力です」と語っています。

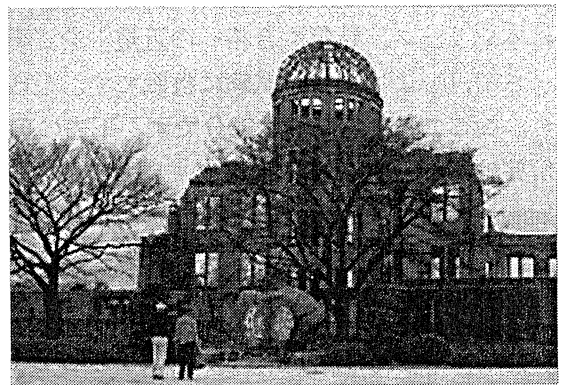
人が人を殺す戦争。

世界各地で、いまだ戦争の火が消えないのを哀しく思います。

筆者の父も、筆者がまだ母のおなかにいる時出征し、昭和20年7月ビルマ（現ミャンマー）で戦死しました。

終戦があと一月早ければ、広島も、長崎も、そして私の父もと思います。

合掌



世界遺産・広島原爆ドーム